

### ① 神殿を清められるメシア—神に喜ばれる礼拝をささげるために

子ろばに乗ってエルサレムに近づかれたイエス様は、今日の箇所ですぐにエルサレムに到着し、その中心にある神殿に入られます。そしてイエス様は「そこで商売をしていた人々を追い出し始め」られました。当時、神殿の一番外側にある「異邦人の庭」と呼ばれる場所で商売をしている人々がいました。彼らが売っていたのは、いけにえ用の動物（牛や羊や鳩）です。いけにえ用の動物は「傷のない」ものでなければなりませんでしたが、そこで売られているのは祭司によってチェック済みの動物でした。遠くからエルサレムに巡礼に来る人たちは動物を引いてくるのが困難だったので、そこで売られている動物を買ってささげていたのです。そのような商売は当時普通のことであり、神殿で権威をもっていた祭司長たちも認めていたことでした（その利益の一部は祭司たちのものになったようです）。しかしイエス様はそういう商売人たちを神殿から追い出し始めたのです。日本でも神社ではお祭りのときたくさんのお屋台が出ていますが、もしそれを急に神社から追い出そうとすると大変な混乱が起こるでしょう。イエス様がこの時神殿から商売人たちを追い出されたということも、それ程大胆で衝撃的なことだったのだと思います。

しかしイエス様がそのようにして神殿を清めるということは実はすでに旧約聖書に預言されていたことでした。マラキ書 3 章 1~4 節

「見よ、わたしは使者を送る。彼はわが前に道を備える。あなたたちが待望している主は突如、その聖所に来られる。あなたたちが喜びとしている契約の使者、見よ、彼が来る、と万軍の主は言われる。だが、彼の来る日に誰が身を支えうるか。彼の現れるとき、誰が耐えうるか。彼は精錬する者の火、洗う者の灰汁のようだ。彼は精錬する者、銀を清める者として座し、レビの子らを清め、金や銀のように彼らの汚れを除く。彼らが主に献げ物を正しくささげる者となるためである。そのとき、ユダとエルサレムの献げ物は遠い昔の日々に過ぎ去った年月にそうであったように、主にとって好ましいものとなる。」

イエス様は預言の通り突如、聖所（神殿）に来られ、汚れを除き、清められたのです。それは人々が神様に正しく礼拝をささげ、それが神様に喜ばれるものとなるためでした。

新約聖書では「教会」が聖霊の住んでくださる「神の神殿」と言われています（I コリント 3:16-17）。そして教会は何より神様を礼拝する場所です。その私たちの礼拝が神様に喜ばれるものとなるために何が大切なのか。どういうことをしてはいけないのか。そのことを私たちは今日の御言葉から教えられるのだと思います。

### ② 「祈りの家」であるべき神の家を「強盗の巣」にしてしまう過ち

イエス様は神殿での礼拝を改革をされたと言うことができます。そのために最初にしたことが商売人たちをそこから追い出すということでした。しかしイエス様はなぜそのようにされたのでしょうか。先ほど見たように、そこでなされている商売は神殿での礼拝に必要なものだったはずですが、イエス様は商売をしていた人々に次のように言われました。

「こう書いてある。『わたしの家は、祈りの家でなければならない。』ところが、あなたたちはそれを強盗の巣にした。」

ここで引用されているのはイザヤ書 56 章 7 節の言葉です。引用されている言葉のすぐ前には「彼らが焼き尽くす献げ物といけにえをささげるなら、わたしの祭壇で、わたしはそれを受け入れる」という言葉があります。イエス様も今日のところで、動物をいけにえとしてささげること自体を否定しておられるのではないのだと思います。しかしイエス様は『わたしの家は、祈りの家でなければならない』という言葉を用いることによって、ただ形式的にいけにえをささげるだけではなく、それと同時に真実に神への祈りがささげられなければならないということを強調して教えられたのです。

そして商売人たちに向かって、「しかしあなたがたは、それを強盗の巣にした」と批判されました。「強盗の巣」とはきつい言葉です。彼らは実際に強盗をしていたわけではありません。ただ商売をしていた、しかも神殿での礼拝に必要なものを売っていたのです。それなのになぜイエス様はその人々を「強盗」呼ばわりされたのでしょうか。ちょっと厳しすぎるのではないかと思えないこともありませぬ。イエス様がこの言葉を語られた意図を理解するためには、「強盗の巣」という言葉も実は旧約聖書からの引用であるということを知ることが必要です。それはエレミヤ書 7 章 11 節ですが、次のような言葉です。

「わたしの名によって呼ばれるこの神殿は、お前たちの目に強盗の巣窟と見えるのか。そのとおり。わたしにもそう見える、と主は言われる。」

これは礼拝するために神殿にやってきたユダの人々に対し、エレミヤを通して語られた主の言葉です。当時のユダの人々は普段の生活の中で様々な悪事を人と神に対して行いながら、それを悔い改めることなく、ただ「主の神殿」という言葉に迷信的に依り頼んでいました。それゆえ神様は彼らに対し、悪事を行いながら、「わたしの名によって呼ばれるこの神殿に来てわたしの前に立ち、『救われた』と言うのか。お前たちはあらゆる忌むべきことをしているではないか。わたしの名によって呼ばれるこの神殿は、お前たちの目に強盗の巣窟と見えるのか。そのとおり。わたしにもそう見える」と言われたのです。「巣窟」と訳されている言葉は「洞窟、洞穴」という意味もあります。また「強盗」とは「山賊」と訳すこともできます。すなわち山賊が身を隠すための洞窟というイメージです。ユダの人々は強盗のように欲望のままに悪事を行いながら、神殿に来ることによってそれを覆い隠そうとしていたのです。それゆえ神殿が「強盗の巣窟、隠れ家」になってしまっている、神の目にはそのように見える、と言われたのです。イエス様はこの「強盗の巣窟」という言葉を使われました。イエス様の目には神殿で商売をしている人たちは「強盗」のように見えていました。彼らは神殿でいけにえ用の動物を買わなければならない人の弱みにつけこんで、普通よりかなり高い金額で動物を売り、私腹を肥やしていた、利を貪っていたのです。しかしそれを神殿で行うことによって自分たちのしていることを正当化していたのです。「これは神殿礼拝に必要なことなのだ」と。しかしそれはイエス様の目から見れば、自分たちの行なっている悪事や貪欲を神殿によって覆い隠そうとしている、神殿を自分たちの悪事の隠れ蓑にしている、その意味で神殿を「強盗の巣窟」にしていまっていることに他ならなかったのです。

私たちももし、普段の生活の中で悪を行い欲望のままに生きながら、それを悔い改めることなく、ただ教会（礼拝）に来ているから「大丈夫」と考え、教会を自らの悪を覆い隠すために手段（場所）にしてしまうなら、私たちも「祈りの家」であるべき神の家を「強盗に巣窟」にしてしまうことになりま

す。もちろん教会は「罪人の集まり」であり、誰も罪を犯さない人はいません。しかし教会はその罪を覆い隠すための場所であってはならないのです。むしろその罪を真摯に悔い改め、「神様、罪人のわたしを憐れんでください」（ルカ 18:13）と祈るべき場所です。そうするなら神様は私たちを憐れみ、赦し、義としてくださいます。教会はそのような神様への感謝と賛美をささげるべき場所でもあります。

### ③主イエスの教えに熱心に聞く群れとしての教会

そして19章47節を見ると、イエス様は清めた神殿で毎日教えたおられた、とあります。しかし「祭司长、律法学者、民の指導者たちは、イエスを殺そうと謀った」。エルサレムまたその神殿における権威者たちはイエスの教えに耳を傾けることなく、むしろ邪魔者として抹殺しようと企んだのです。しかし彼らは「どうすることもできなかった」、どうしたらよいかわからなかったのです。なぜなら「民衆が皆、夢中になってイエスの話に聞き入っていたから」です。

民の指導者たちはイエスを殺そうと企む一方、民全体はイエスの話に熱心に夢中になって耳を傾けていたのです。このこともまた主イエスの神殿における礼拝改革の一部であったと考えることができます。なぜなら、神様に喜ばれる礼拝をささげるためには、まず何よりも神の言葉に聞くことが重要だからです。エレミヤ書7章22節23節には次のようにあります。

「わたしはお前たちの先祖をエジプトの地から導き出したとき、わたしは焼き尽くす献げ物やいけにえについて、語ったことも命じたこともない。むしろ、わたしは次のことを彼らに命じた。「わたしの声に聞き従え。そうすれば、わたしはあなたたちの神となり、あなたたちはわたしの民となる。わたしが命じる道にのみ歩むならば、あなたたちは幸いを得る。」

動物をいけにえとしてささげることは確かに律法において定められたことです。しかし神様がイスラエルをエジプトから導き出した直後にそのことを命じられたわけではありませんでした。むしろ神様は「わたしの声に聞き従え」と命じられたのです。しかし、イスラエルはかたくなに聞き従わず、神に背を向けました。今日の箇所に出てくる民の指導者たちもそのようなかたくなさの罪の中にあります。しかし少なくともこの時、民全体は熱心に主の教えに耳を傾けたのです。

ここに私たちの教会のあるべき姿が示されてるように思います。それは主イエスによって語られる神の言葉、神の声に熱心に耳を傾けるということ、それに聞き従い、その道を歩んでいくということです。そうすることによってはじめて私たちの礼拝は神様に喜ばれるものとなります。逆に言えばそれなしに、ただ形式的に礼拝やいけにえをささげても、それは神様に喜ばれ受け入れられるものにはならないということです。

私たちの教会が神様に真実に祈る「祈りの家」となり、今も語ってくださる主の御言葉に熱心に耳を傾ける群れとなるように、またそうあり続けることができるように祈り願いたいと思います。